

岩崎史郎（いわさき・しろう）

一九四三年生まれ。一橋大学名誉教授。専攻は代数学。名古屋大学で修士、北海道大学で助手、その後一橋大学へ。二〇〇七年三月退官。

このインタビュは、一橋大学大学院言語社会研究科二〇〇七年度紀要『言語社会2』の特集企画の一環として行われた。言語社会研究科はその名称が示す通り「言語」と「社会」に関わる様々なものごとをその研究領域とするいわゆる人文科学系の研究科である。特集は「人文無双——天地の間を駆けめぐれ」と題して、人文科学ないし人文科学の危機をめぐる近年かまびすしい議論に一定の参入を試みたものだが、作業を進めるにつれ、人文科学が今後いかにあるべきかという問いの答えは結局、「人文科学が」いかにあるべきかなどという狭い枠組みの問いを越えた彼方にしかないだろう、という確かな気がだんだんとしてくるのだった。

そうした確信が増すのと並行して、この岩崎氏の記事もまた少しずつ膨らんだ。インタビュートープを起した原稿をもとにメールで推敲のやりとりを重ねるにつれて、なんというのか、

ちょうど、氏がお好きだという泰山木の白い大きな花のように、記事が、ひとりでに、滲み出るようにかそけく光りながらたわたと開いてゆくのである。わたし——編集人はそれを抑えることができなかった。花が、人文科学のほうへではなくそれを越えるもののほうへ、それを無にしかねないもののほうへ、それゆえに素晴らしいとも思えるもののほうへ向かって開いてゆくの、抑えることができなかった、そこで懐かしいインドりんごのように香るのが、「人文科学」などという用語とはまるで無縁なところで生きられてきたひとつの生の探究行路、それをなお見はるかしてやまないひとりのひとのまなざしであり、それはおそらくあらゆるひとの生がそうであるだろうようにそれ自体において、ほとんどその個性においてこそ屹立するものだということがあらかになっていった。そのことを切り捨てて記事全体を「人文科学」一般の問題性のほうへ無理やりにたわめてまで本誌の限られた頁数の中へ収めてしまおうとはすべきでないと思われた。泰山木の花は、狭苦しいところ押し込めたくはない。広い戸外の樹の花は広く戸外にあらしめよ、それができて初めて、

人文的なものが本当に「無双」たりうる希望もどこかへ繋ぐことができるだろう——

退官直後のご多忙のさなかに多大な時間を割いてくださった氏のご好意を忘れない。「この記事は私たちの共同作業の賜物ですね」と懇切におっしゃってくださったことも。特集「人文無双」にはラテン語の副題がついていて、邦訳すれば「リベラル・アーツは全てを繋ぐ——世界を記述せよ、そして自身を知れ」というのだが（裏表紙にラテン語を載せておいた）、この副題をべつだんお知らせしたわけではなかったにも関わらず、編集過程においてこの標語を最もしみじみと実感させてくれたもののひとつが、氏との共同作業だったのだ。（武）

尾方 一郎（おがた・いちろう）

一九六一年生まれ。言語社会研究科教授。専門、近代ドイツ文学と思想。

武村知子（たけむら・ともこ）

一九六三年生まれ。同准教授。『言語社会2』特集責任担当編集委員。